

大会の歩みを支え続けて
第50回の開催へ導いた情熱

本年で第50回を迎えた「熊本甲佐10マイル公認ロードレース大会」。世界陸上やオリエンピック出場選手、全日本実業団駅伝や箱根駅伝に名を連ねるトップランナーたちが集うロードレースとして全国に知られている本大会の歩みを語る上で欠かせない人物が、本田和登さん（中横田区）。本田さんは、町職員だったころの第6回大会から本大会

の運営に携わり、退職後も選手勧誘や大会運営など、支え続けている存在。「本田さんなくして、この大会は続かないかった」と関係者が口をそろえるほど、その貢献は計り知れない。本田さんは、「今まで全国から選手が集まりますが、ここまで道のりは試行錯誤の連続でした」と笑顔で大会の歴史を振り返る。

も予算は限られ、実業団とのつながりもほとんどなかつたため、「最初は、各県の陸協にお願いして、1～2人派遣してもらうのが精一杯でした」と苦い表情の本田さん。そんな中、九州屈指の強豪である旭化成陸上競技部に田を向けるが、面識のない状態での依頼は厳しく、最初は「甲佐町はどこですか」と一蹴されたといふ。

から選手が集う現在の大会へとつながっている。

「私の原動力は、熱意と絆（きずな）、そして感謝です」と語る本田さん。第50回という大きな節目を迎え、「この大会が、世界へ羽ばたく選手たちの登竜門として、これからも成長していくことを願っています」と、穏やかな笑顔で駆ける選手たちと甲佐10マイルの輝く未来を見据える。



本田 和登さん
Kazuto Honda

オリンピックに出場するようなトップ選手からも「熊本のおじいちゃん」と親しみを込めて呼ばれる本田さん。長年にわたり監督や選手一人ひとりと向き合って、誠実に信頼関係を築いてきたからこそ、多くの選手がこの甲佐の地に集い続けている。

田の名も大会も残らない」と考えるようになったといふ。転機となつたのが、第8回大会からの日本陸上競技連盟認公認コースの取得。「名称」にあえて「熊本」を入れたのは、甲佐町の名前を全国に知つてもらうためでした」と話す。

それでも諦めなかつた本田さん。「挑戦せずして駄目と思ふな」の信条のもと、延岡へ何度も足を運び、ついに第10回大会で旭化成からの選手派遣が実現する。このことをきっかけに「甲佐10マイル」の名が世に広まり始め、他の事業団チームも少しづつ参加するようになった。